（別紙 2）

審査の結果の要旨

氏名　　大橋　恵

本論文は、個人の将来予測において、自分の「ふつうさ」を過大視するという新たなバイアスを報告し、その原因について考察するものである。従来の欧米での研究では、個人の将来予測が楽観的なものか、あるいは、悲観的なものか、という視点から研究が行われていた。そうした研究では、日本人は欧米人に比べて悲観的である、という結果が得られているのであるが、著者はこのような単純な図式だけでは日本人の将来予測のバイアスを説明できないと考え、日本人にとって重要な意味を持っていると思われる「ふつうさ」の概念を中心として、将来予測の問題を再構成している。まず、研究 1 では日本語における「ふつう」の意味を調べ、大学生には中立的な意味をもつものと理解されていることを確認した。しかしながら、この中立的な形容語であるはずの「ふつう」という言葉が、人を形容するときには、良い意味を強くもつこと、そして「ふつうでない」には悪い意味があることを見出した（研究 2）。研究 3 では、実験的な手法を用いて、将来予測をする際に、出来事の幸不幸にかかわらず、高頻度の出来事が平均的な人と比べて自分に起こる可能性を、低頻度の出来事が平均的な人と比べて自分に起こる可能性よりも、高く評価することを示した。さらに、個人の将来予測におけるこのバイアスのサイズは、自分を「ふつう」だとみなしている程度及び「ふつう」を望ましく評価する程度と正の相関があることを示した。この新たなバイアスを郵送による社会調査を含む追試(研究 4,5)でも確認している。さらに、研究 6 では、アメリカでの追試も試みている。

こうした研究結果に基づき、本論文では、自分を「ふつう」であるとみなしたいという動機があるために、自分の将来について、「ふつう」であると過度に認知したと解釈できると考え、この現象を「ふつう」バイアスと名づけている。このバイアスは、自分を「ふつう」と見なしたいがゆえに「ふつう」から逸脱してしまうという意味で非常に興味深い現象である。

本論文では、日本文化を独自に分析するという固有文化心理学的なアプローチを採用したことにより、米国での研究に依存したこれまで手法では取り上げられることのなかった新たな現象を明らかにすることが可能になったものであり、その新奇性は高く評価できるし、理論的にも大きな意味がある。

ただし、いつくかの点が今後の課題として残されている。まず、本論文では日本人が自分の「ふつうさ」を一般的に過大視しているとみなしており、また、「ふつうさ」の過大視は、それが望ましいからだと想定しているが、これらの点についてはさらに吟味を行う必要がある。さらに、アメリカでの追試の結果も明確なものとは言いがたい。しかしながら、全体として新たな認知的バイアスの存在を確認した意義は大きいと判断した。

以上より、本委員会は、本論文を博士(社会心理学)の学位を授与するにふさわしい業績と認定するものである。